

経済経営学類

平成29年度 推薦入学試験：小論文

(A 推薦・B 推薦・C 推薦)

資料は、田中俊之『男がつらいよー絶望の時代の希望の男性学ー』（KADOKAWA、2015年）の第2章「仕事がつらい」から抜粋したものである。これを読んで、以下の問題1、問題2のすべてに答えなさい。

問題1

資料中にある3つのグラフを用い、本文の内容を600字以内で説明しなさい。

問題2

本資料の後には、『「社会人」という日本語は間違っている』という節が続きます。本文の内容を踏まえ、なぜ「社会人」という日本語は間違っているのか、あなたの意見を600字以内で述べなさい。

\*解答上の注意

- ・解答は横書きとする
- ・句読点や空白も字数に含める
- ・算用数字およびアルファベットは1マス2字とする

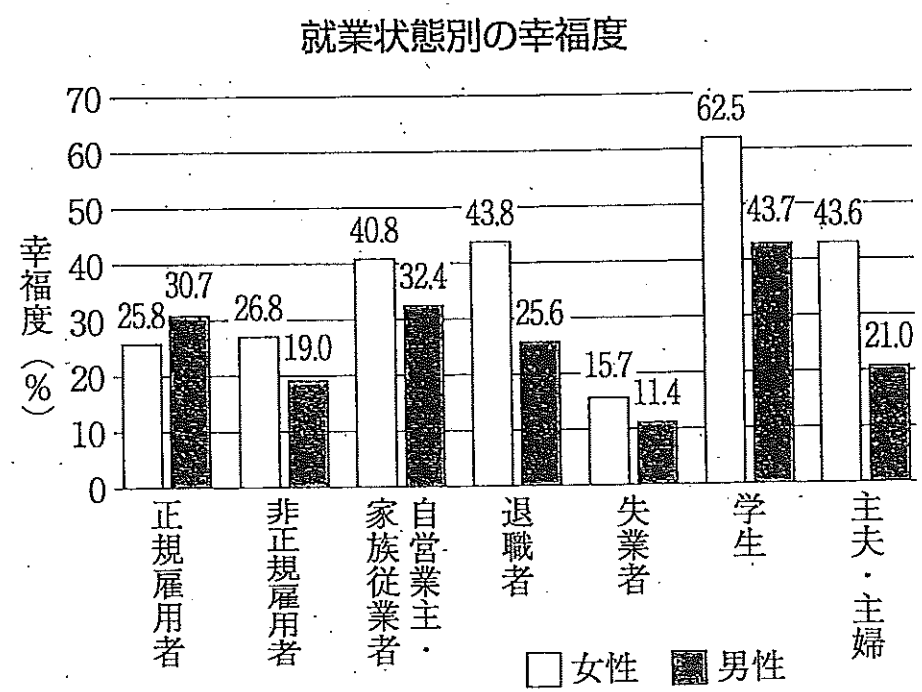
男性は不幸なのか

『平成26年版 男女共同参画白書』の特集は、「変わりゆく男性の仕事と暮らし」でした。男女共同参画というと女性のための政策という印象があるかもしれませんが、実際、『男女共同参画白書』で男性の特集が組まれたのは今回が初めてです。男性の生き方の見直しは、行政からも注目されている課題なのです。

『クローズアップ現代』「男はつらいよ2014 1000人『心の声』」の冒頭では、「男性の幸福度は女性よりも低い」というデータが紹介されました。このデータは白書の特集から引用されたものです。

「現在幸せである」と回答した割合が、女性の34・8%に対して、男性は28・1%でした。「生きづらい」と感じている男性が少なくない現状で、この数字は世間の関心を集めることになりました。

しかし、たったこれだけのデータで、現代の日本では「男性の方が女性よりも不幸だ」と安易に結論を出すことはできません。単純なデータを元に議論をしても、男性と女性の対立を煽る水掛け論に陥るだけです。白書には就業状態別・男女別の幸福度が掲載されています。

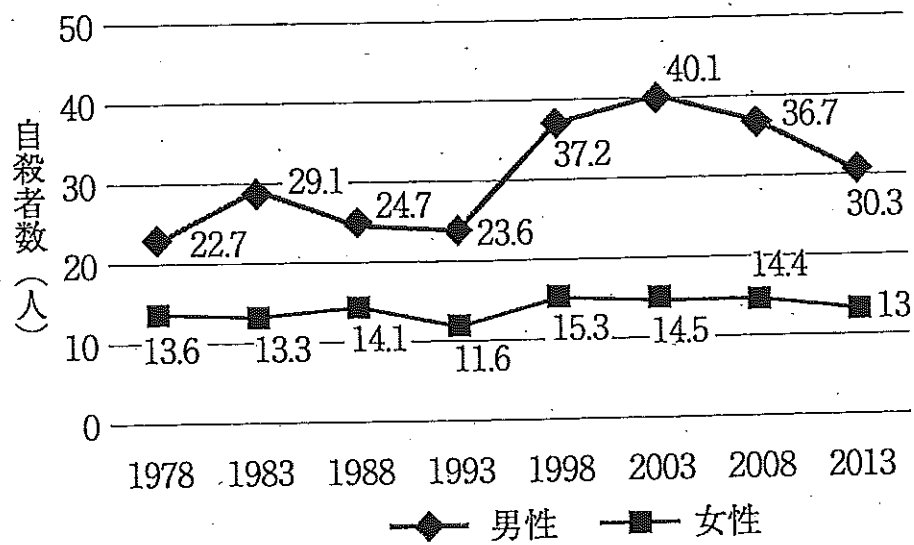


出所：内閣府『平成26年版 男女共同参画白書』

一見して明らかのように、失業者の幸福度が最も低くなっています。男女差があまりないことが失業者の特徴です。仕事を探しているのを見つからない状況では、性別を問わず幸せだとは思えないのです。

幸福度が最も高いのは学生です。学生は失業者と同様に働いていませんが、しっかりとした所属と身分があります。したがって、学生が一番幸せというわけです。男性全体の平均である28・1%と比較すると、男子学生の43・7%は非常に高い数字となっています。そして、唯一、男性よりも女性の幸福度が低いのは、正規雇用者です。

人口10万人当たりの自殺者数



出所：内閣府『平成24年版 自殺対策白書』

男性の幸福度が低いという話題は注目を集めました。平均の数字が男女で6%ぐらい差があるにすぎません。そして、性別よりも就業状態が幸福度に大きな影響を与えているのですから、この数字は男性が不幸かどうかを判断する上で、それほど参考にならないといっているでしょう。

### 高すぎる男性の自殺率

幸福度よりも明白に男女差があり、かつ深刻なデータがあります。それは自殺に関する数字です。日本では1998年に、自殺者数が3万人を超えました。その後、2003年の34,427人をピークに、2011年まで連続して3万人以上の状態が続いてしまいます。

1997年の男性の自殺者数は16,416人でしたが、翌年の1998年には23,013人へと急増しました。90年代後半は、銀行による中小企業への貸し渋りや大企業の倒産などが「社会問題」になっていった時代です。

『平成24年版 自殺対策白書』でも言及されていますが、健康問題を除けば、中高年男性の自殺理由のほとんどが仕事やお金に関わるものです。

1998年から2011年まで、男性の自殺者は常に2万人を超えています。この間、女性の自殺者が1万人に達したことはありません。2003年には人口10万人当たりの自殺者数である自殺死亡率が、男性で過去最悪の40・1を記録します。これは女性の14・5と比較すると2・8倍です。

近年の傾向として注目する必要があるのは、20代以下の若者で自殺死亡率が上昇していることです。これについても『平成24年版 自殺対策白書』を参照しておくと、中高年に比べて仕事を理由とした自殺の割合が高いのが特徴となっています。また、白書では「就職失敗」に

よる自殺者が2009年以降に増えていることも指摘されています。

男性の自殺については、第1章でも指摘したように、弱音を吐けないことが原因の1つとして考えられます。2012年に内閣府自殺対策推進室が実施した「自殺対策に関する意識調査」では、悩みやストレスを抱えた時に、人に相談したり、助けを求めたりすることに対して、中高年男性の半数以上がためらっているというデータが出ています。

若者の自殺の要因に関しては、仕事や就職に関する情報の過剰さを指摘しておきます。日本企業は新卒一括採用であるため卒業時に就職できないと不利であるという情報は、今や就活生であれば誰でも知っている「常識」です。その「常識」に基づいて考えれば、卒業するまでに内定をもらえなかった学生が失望しないわけがありません。

また、就活では徹底した自己分析が求められています。このことが学生の就職活動を難しくしている側面があります。就活情報サイトのマイナビ2015に掲載されている「まる分かり！就活の進め方」によれば、自己分析とは、「どんなシゴトがしたいか」「どんなシゴトが自分に向いているか」「どんな会社に行きたいか」を認識・理解することだそうです。

社会学者の宮台真司さんは、今の学生が「自分はこういう人間だから、こうした仕事に向き、別の仕事には向かない」という適職幻想を抱いていると指摘しています。適職幻想に自己分析が影響を与えているのは明白です。過酷な就活の果てに、適職だと思っていた職業に就けない学生はやはり落胆するでしょう。

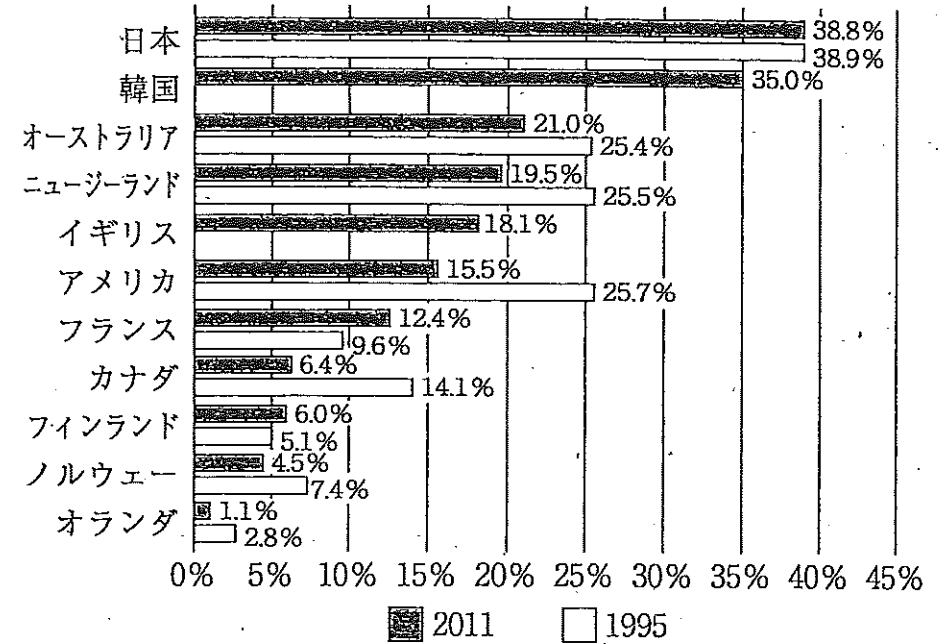
さらに、実際に働き始めてから「思っていた仕事と違う！」とがっかりして辞めていく若者が少なくありません。これも適職幻想の弊害です。就職に関する情報が溢れかえっているため、かえって仕事に対する若者の悩みは深くなっているのです。

仕事の悩みや就活失敗が自殺にまでつながる背景には、こうした事情があります。したがって、最近の若者が弱くなったなどといった批判は的外れです。若者にむやみに大量の情報を提供している大人たちこそが反省しなければなりません。

### 問題として直視されていない長時間労働

男性の自殺が仕事やお金の問題と関連していたことからわかるように、日本では男性と仕事の結びつきが強すぎます。そのため、日本人が「働きすぎ」という話を聞いても少しも意外な印象はないはずです。具体的に、日本の男性はどのくらい働きます

### 週50時間以上働いている男性



出所：労働政策研究・研修機構『データブック国際労働比較2014』

ぎているのでしょうか。  
2011年のデータで確認すると、週50時間以上働いている男性は38.8%です。週に50時間以上働くためには、週5日出社するとして、単純に考えて1日に10時間労働している計算になります。通勤時間をあわせれば、約4割の男性が24時間の半分近くを仕事のために費やしているのです。

長時間労働について国際比較をしてみると、日本男性の「働きすぎ」がよくわかります。韓国は日本の数字に近く35%ですが、アメリカでは15.5%と日本の半分以下の割合に

すぎません。フィンランドやノルウェーは一桁ですし、オランダにいたってはわずか1.1%となっています。

日本男性の「働きすぎ」は、「働き盛り」や「今が頑張りどき」といった言葉で誤魔化されてきました。男性たちが自分に「仕方がない」「当たり前」と言い聞かせてきた側面もあるでしょう。しかし、生活のほとんど全てを仕事に費やすような男性の生き方が、世界的に見て特殊であることを理解しなければなりません。

男性の長時間労働は様々な問題の元凶になっています。長時間労働がもたらす最悪の結末は過労死・過労自殺です。2014年11月1日に過労死等防止対策推進法が施行され、ようやく国が責任を持ってこの問題に取り組む姿勢が示されました。ただし、すでに1980年代後半には過労死が「社会問題」になっていたことを考えれば、遅すぎたといえます。

長年、過労死・過労自殺の問題に携わってきた「過労死110番全国ネットワーク」の活動は、1988年から始まっています。ホームページに記載されている過労死と過労自殺の定義を確認しておきましょう。

過労死とは、仕事による過労・ストレスが原因の一つとなって、脳・心臓疾患、呼吸器疾患、精神疾患等を発病し、死亡または重度の障害を残すに至ることを意味します。また過労自殺は、過労により大きなストレスを受け、疲労がたまり、場合によっては「うつ病」を発症し、自殺してしまう事を意味します。

仕事の原因となつてこのような事態が起きていいはずがありません。私たちは「生きるために働く」のであつて、「働くために生きていく」わけではないからです。新鮮味のない主張かもしれませんが、働く上でこの原則はしっかり認識しておくべきです。

過労死や過労自殺にまで至らなくても、長時間労働で健康を損なっている男性は多いです。命を削つてまで働く必要があるのか、自分の人生にとって何が大切なのか、これを機会に立ち止まつてよく考えてみてください。

家族がいれば、みんなで真剣に話し合つてみるのもいいでしょう。「当たり前」や「仕方ない」などという言葉で目をそらしても、問題は深刻になっていくだけです。

#### 自己犠牲が評価される日本

1995年の時点では、他国でも2011年より長時間労働の割合が高くなつていました。当時のアメリカでは、4人に1人以上の男性が長時間労働です。フィンランド、ノルウェーは、それぞれ5・1%と7・4%でした。2011年にわずか6・4%だったカナダでさえ、7人に1人の割合だったのです。国によって理由は様々ですが、長時間労働は解消できることが分かります。

日本の場合、1995年時点で長時間労働をしている男性の割合は38・9%です。十数年前と現在でほとんど差がない状況です。なぜ日本では男性の長時間労働に改善の兆しさえ見えないのでしょうか。

長時間労働が減らない理由の1つとして、仕事に対する評価の仕方があります。簡単にいうと、生活の全てを仕事に注ぎ込める能力が、日本の会社では求められているということです。経済学者の熊沢誠さんは、この能力を「生活態度としての能力」と名づけました。

「残業オツケーですー」「休日出勤できますー」。こうした働き方ができる男性社員の能力が高いとされ、評価が上がるというわけです。これは単に長時間働けるというだ

けの話ではありません。

先ほどの威勢のいい発言には、「来月から転勤でも行けますー」を加えることができます。生活の全てを仕事に注ぐわけですから、住む場所の移動もそこには含まれます。要するに、〈生活態度としての能力〉とは、会社が求める多様な要求に柔軟に対応し、自分の都合など考えずに受け入れる能力なのです。

フルタイムで働いたことのない学生でも、アルバイトをしたことがあれば〈生活態度としての能力〉の意味を実感として理解できるはずですが、

飲食店などでのアルバイトでは、シフトに穴が空いてしまうことがあります。そこで自分の予定をキャンセルして出勤できるアルバイトは「使える」と評価されます。逆に、サークルの合宿や学校の試験勉強などを理由に休もうとすれば、「使えない」と評価されることになるはずですが。

もちろん、学生のアルバイトとはいえ、従業員の一人として自覚を持つて働かなければなりません。それは当たり前のことです。しかし、シフト制のアルバイトは、自分の都合にあわせて働けることを売りに募集をしています。

あるファストフード店の求人広告には、次のように書いてありました。「希望スケ

ジュール制なので、自分のライフスタイルにあわせた勤務ができますー」。このような募集をしておきながら、学校の都合を優先するアルバイトに対して「使えない」と評価するのはおかしいことです。

アルバイトにも〈生活態度としての能力〉を求めるならば、募集の文章を「希望スケジュール制ですが、お店の都合にあわせた勤務をしてもらいますー」と書きかえるべきです。

アルバイトでさえ生活を仕事に捧<sup>まか</sup>げることが求められる日本社会で、男性正社員の長時間労働が改善するはずはありません。この問題は、非正規雇用が増えていることとあわせて考えるとさらに深刻です。

身分の安定性は保障されていないにもかかわらず、従来の正社員と同じようなレベルで〈生活態度としての能力〉を求められる人が増えているからです。重要な論点なので、この問題は後ほどあらためて取り上げます。

「社会人」という日本語は間違っている

(以下略)

# 平成29年度入学試験 小論文「出題意図」

(入試情報公開用)

経済経営学類 推薦入試

資料として、田中俊之『男がつらいよー絶望の時代の希望の男性学ー』(KADOKAWA、2015年)の第2章「仕事がつらい」から一部抜粋した。

問題1では、日本における性別による労働環境の違いを3つのグラフを用いて説明し、性差による働き方の違いについて説明させる(読解力・整理力・表現力)。

問題2本資料の内容を踏まえたうえで、社会人というに日本語は間違っているという著者の指摘について、自身の考えを述べさせる(読解力、論理構成力、表現力)。